
イーストオアシス

吉野華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イーストオアシス

【Nコード】

N3389F

【作者名】

吉野華

【あらすじ】

辺鄙な砂漠の町に暮らすフォレストは、将来のことで現実逃避をしたい人並みの高校生。親友に恋する勝ち気な従姉に図らずも振りまわされる、そんな夏休み。

第1話 砂嵐の午後

朝から照りつける太陽。砂礫混じりの熱風。荒涼の砂漠の中の我が町イーストオアシス。サボテン。砂漠の海と点在するサボテン。近所の市民プール。それから、寄せては返す波のごとく繰り返す単調な日々の繰り返し。

この長い休暇が終われば、気難しい親父の小言をのらりくらりとかわしてきた俺も、さすがに進路の問題を考えなくてはならなかった。俺は暇つぶしに、現実逃避のために、何か風変わりな出来事を探していた。

面白ければ何でもいいんだよ。夏の乾燥した青空を漂う飛行船を見上げて、俺は思った。

将来は冒険者になるのもいい。宇宙船の乗組員。それとも、縦横無尽に戦場を駆ける軍人なんていうのはどうだ？ バスタードソードで敵を切り裂くんだよと俺が言うと、友人のハンニバルは肩を聳やかしてこう答える。

「今どきの戦場は化学兵器さ。剣なんてファンタジーの世界じゃ英雄になれても、現実じゃ只の馬鹿だよ。映画でもあっただろう。一発で射殺されておしまい」

夏のうだるような暑さの中、大して深く考えていたわけではなかったんだと俺は言い訳をした。同い年のくせに、ハンニバルは冷めている。彼がこんなふうにいるもすかしているわけじゃなく、馬鹿げた騒乱を楽しむ気のいい奴だってことは分かっている。

でも彼が一度も心からは笑ったことがないってことを、俺はずっと前から知っていた。

「それよりフォレスト、大学は？」

並んで道を歩きながらハンニバルは言った。砂漠の果てのこの辺境の町にだって、昨今は最低限の行政は行き届いているものだ。しかし俺たちが歩く文明によって完璧に管理舗装されているはずの道路は、いつだって砂に侵食されて、半分は過去の遺物のように砂漠に埋もれかけていた。

「別に、何も考えてない」

俺は答えた。

「進学しないつもりか？」

ハンニバルはなお俺に迫る。彼のように成績に何の問題もない優等生ではない俺は、近頃では夕食の度に大学進学を迫る父親や出来のいい年子の兄貴の存在を思い出して、ついイラツとした。

「進学したら何かいいことがあるのか？」

「それは……、学生を続けられる」

俺の切り返しから不機嫌さを感じ取ったのか、ハンニバルは幾らか声のトーンを落とした。そうとも、進学なんて、高校生がすんなりその有用性を回答できるほどには大義のあることじゃないんだ。

「だね。それから？」

俺は腕組みをしてハンニバルを見上げた。昼前に起きてから深夜にラジオを消してベッドに潜り込むその瞬間まで、現実には属するすべての問題に係わりを持ちたくない俺は、断固その姿勢を譲らなかった。

するとハンニバルは少々真面目な顔をして、訥々と語り始めた。教師たちがヒステリーを起こすほどではないにしても、学内の成績優秀者でありながら校則違反の常連でもあるハンニバルだったが、どんなに悪ぶってみせても彼の根が真面目だっていることは日常の彼の話しぶりからして嫌というほど伝わってくる。そんなふうに髪なんか伸ばすのやめて、もっとお堅くしていなよ、なんて嫌味が喉からでかかっても言わないのは、彼が俺の幼友達だからなのだ。

「つまり、卒業したら学士になれる。やっぱり大学を出ていると出ていないのとじゃ、世間の目も違うだろう。有名校ならなおさらだ。この町の学者の間にも、学閥があるほどだよ。」

それに、大学を出れば給料が高いんじゃないか。この町には戻らないで、都市のほうに出て行くにしても、やっぱり有利になるものだと思う。」

「都会はなべ底景気だって親父が言ってたぞ」

「ああ、なるほど。フォレストの家は家計が苦しいのか……」

「なんでそうなるんだよ」

抗議のために再び彼に目を向けると、ハンニバルの肩の辺りまで伸びた茶髪が、砂混じりの温風によって女の髪のように靡いていた。勿論、別にそれに見惚れたわけじゃない。確かにハンニバルは、同性から見てもなかなかイケメンであると思う。それもひ弱な優男なんかではなく、彼の野性味の強い顔つきが羨ましいと思わないではないが、しかし俺は自分のこのいかにも人のよさそうな青い目のほうが気に入っている。

俺が注目したのは、珍しく露わになった彼の横顔にだった。いや、そうと言うよりは、そこに宿ってこいつという存在を彩っているそこはかとないう不幸せに、と言ったほうがより正確だったろうか。

ハンニバルは代々この土地の名士である裕福な家庭の長男で、子供の頃から何不自由のない恵まれた環境で育っていることを俺は知っ

ていた。

その上大柄で背が高く、俺と同じ帰宅部である以上大して運動もやっていないだろうに、フットボール部のスター選手のような羨望すべき体格をしていた。これだけの外見の上に成績優秀であるということは、つまりはクラスでは最も影響力を持つ人間のうちの一人ということ、必然的にスクールカーストの上位者ということになる。大して愛想もよくないっていうのに昔から女どもには無条件に人気があった。

けちのつけようのない理想的な人生。

それなのに何故、思わず払い除けなくなるような陰鬱がこいつにつきまとっているのだろうか？

それは昼食を取るためになじみのハンバーガーショップへ向かう道すがら、何てことのない瞬間の出来事だった。気がつくとな既に俺たちの話題は変わっていて、俺はバイクが欲しいのに親父が金を出してくれないことをハンニバルに愚痴り、ハンニバルは昨年亡くなった彼のお祖父さんから高級車をプレゼントされたことを卑屈な様子もなく俺に話していた。

卑屈さのないイケメンほど始末に負えないものはないと俺は思ったが、それはまた別の話だ。

第2話 B & R

「B & R」ハンバーガーショップのオヤジであるバンクさんが、相変わらず頼みもしないのにピクルスをたっぷり挟み込んでくれている頃、俺たちはクラス的女子数名と遭遇しているところだった。女子のリーダー格である金髪のマルガリータは、チアリーダーングとダンスを好み、明るくて活発な美人だったが、難点をつけるとすれば女にしておくのが惜しいくらい鼻っ柱の強い性格だったことだ。彼女はティム伯父さんの二番目の娘で、うちのご近所さんで、他でもない従兄弟の俺が言うんだから間違いない。

「涼を取りにね」

蒸し暑い安ハンバーガー店で、気取ったふうに彼女は言った。何しろ彼女の意中の相手であるハンニバルの前だから、このときの彼女の態度は分かりやすいほど彼に媚びたものだった。

まさか彼女の過剰なほどの化粧や色気のせいではないだろうが、俺は暑くてたまらなかったし、その場にいる女どもにはまるで興味がなかったから、そそくさと立ち去ろうとする俺の腕をハンニバルががちり押さえていた。彼が女子に囲まれていることに困って、無言で助けを求めていることが俺には分かっていたが、いったいどうしろって言うんだ？ 俺は恨めしくハンニバルに視線をやった。

「ねえ、ハンニバル君、あたしたちと一緒にランチをしましょうよ。せつかくこうして出会えたんだもの。これも何かの縁だと思うの」

砂漠の中の狭い町だ。ハイスクールは一校しかなく、その周辺が俺たちの活動範囲のすべてだとしたら、町の何処かで顔見知りに出くわすことくらい偶然でも何でもないのだが、それを指摘しようとい

う気にはならなかった。マルガリータをからかうと後が面倒だということもあつたが、とにかくこのときは店の中が蒸し暑かつたからだ。バンクさん曰く冷房が壊れてしまったということだったが、この店で冷房が壊れることは毎朝砂漠に太陽が昇ることよりも既定事項だろう。俺たちがそれでもこの店に通う理由、安いのに美味しいハンバーガーと、冷たいジュースを取りに行きたかつた。

「ハンニバル君は照れているんだわ」

マルガリータの手下の女子たちは、ハンニバルの反応が芳しくないことをそう言つてフォローしていた。

マルガリータは確かに魅力的でないわけではなくて、大学生の恋人がいるつていう噂が耐えなくらいには皆の憧れの的だつた。

俺たちが想像の上でしか知りえない数々の男女の秘密と言うやつを、もうすっかり知つてしまつていふという意味では、俺としても羨望の眼差しを向けなくてもいい。彼女のピンク色の唇や、形のいい胸元が、何人の男を知っているのかなんてことが、その当時の俺にとつては結構な関心事だつたりするわけだ。

「ねえ、フォレスト。あんただつて、あたしたちとランチしたいんでしょ？」

ハンニバルがいつまでも自分の意向を表明しないために、と言うか、遠まわしには何度も断つているのにマルガリータたちがいつまでも食い下がっているために埒が明かないのが現状なんだが、とうとうマルガリータの不満の矛先が俺に向いた。

俺は少し痩せ気味ではあるにしても小男というわけではなく、少なくとも目の前にいる女子の誰よりも背丈はあつたのだが、ハンニバルと比較するとどうしても侮りやすく見えてしまうのだろう。他の女子たちも俺に対しては容赦のない視線を向けてくる。

まるで、俺がハンニバルのコバンザメであるかのような扱いに、俺はさっきから既に充分腹を立てていた。

「嫌なこつた。なんでおまえらと昼飯を食わなきゃならないんだよ。とびきりの美少女っていうならともかく、おまえらじゃ楽しくも何ともないから嫌だ」

するとマルガリータは俺を馬鹿にしたような顔で、軽蔑的なことを俺に言った。

「あら、フォレストのくせに言うじゃない。こつちだって、あんたみたいなガキとなんてお断りよ。ハンニバル君がいなかったら、誰にも声もかけられやしないし、気にもとめられない存在のくせに、相変わらず態度だけは一人前ね。

でもこの機会を逃したら、あんたみたいなのは一生女の子と食事もできないってことを理解するといいわ。ついでにでも誘われているってことを有難いと思いなさいよ」

「けっ。おまえらみたいな遅い奴らが、女の子なんてうちにカウントされるとでも思ってるのかよ。チアリーダーってだけで威張り散らしてるゴリラのくせによ」

「何ですって!?!」

「おいまさかマルガリータ、おまえは自分が可愛い女だなんて勘違いしているんじゃないんだろうな? その胸元を強調すれば、誰もおまえにチヤホヤするのが当たり前だとも思っているのか?」

だったら教えてやるが、ハンニバルは日頃おまえらに脅かされて萎縮しているような、おとなしい女が好みなんだよ。だからおまえが誘っても無駄なんだ」

「フォレスト……いいわ、よく分かった。覚えてなさい。でもこれだけは確かなことよ。あんたはどうしようもないガキで、それに、救いようのないバカだってこと!」

子供の頃、女兒の成長の早さとマルガリータの抜群の運動神経のために俺はいつも同じ年の彼女に喧嘩で敵わず、最後には追いかけまわされ、泣かされる子供だった。

しかしどうしたことかそのときは予想していた反撃もなく、マルガリータはしおらしい態度であっさりと引き下がった。

彼女とその取り巻きが口々に俺を罵りながら店を立ち去った後、俺はハンニバルの脇腹を小突いた。彼は、普段自らがそのようなに振る舞おうと努力しているその軽薄そうな外見通りに演じることくらいわけない性格のくせに、なんで今は鬱陶しいマルガリータたちを威嚇して追い払わなかったのか分からなかった。

彼に好意を寄せていることが丸分かりなマルガリータや、女子たちの前で、少しはいい格好をしたかったからなのか？

「俺に汚れ役をやらせやがって。貸したからな」

俺が呟くと、ハンニバルは心許ない様子で何度か頷いた。

「何だよ、おまえ実はマルガリータのこと気になってたのか？
それとも、気になるのは手下の女の誰かだった？」

俺はそう言いながら、何だかぼうつとしているハンニバルの視線の先を辿った。そこはカウンターの向こうの油にまみれた調理場で、バンクさんの姿が見えていたが、そのとき彼はその白い帽子を取り落としていて、しかし問題だったのは本来であれば決して落ちるはずのないもの、彼の茶色の頭髮までが一緒に床に落ちていているということだった。

そのためにそのカウンター付近では客たちが騒然としていて、ハンニバルはさっきから泣きそうに取り乱すバンクさんと、それを取り巻く何とも救い難いそれらの状況を見ていたのだ。勿論、俺は遠慮

なく腹を抱えて笑った。たとえ執拗にピクルスをサービスしてくれるにしてもバンクさんに対して悪い気持ちを抱いたことはないが、それは平穩な日常の中で目にするものとしては予測不能で、しかも非常にインパクトのあるアクシデントの類だった。楽しまないでどうするというのだ。

そしてそのとき昼食のためにたまたま店を訪れていた客の八割がたは、その非現実的な光景に対し、同じような反応を示していたと思う。好意的な爆笑、人生に彩を添えてくれたバンクさんに対する畏敬、或いはこれまで彼がひた隠しにしていた頭髪に係る重大な秘密に対する驚愕、少しは眉を顰める人間もいた。

そしてそのとき俺はその状況下で少しも笑っていないハンニバルの人格に対してさすがに尊敬の思いを抱きかけたが、実は彼はそんな馬鹿げたアクシデントが目に入らないほど別のものに見入っていたのだった。

彼が何をみつめていたか、俺がその正体を知ったのはそれから少し後のことだ。

第3話 キャラクターTシャツの女

「よくここを利用するのか？」

一連の馬鹿げた騒ぎを乗り越えて、注文したハンバーガーができあがってくるのをもうしばらく待つ間、珍しいことに、ハンニバルのほうから女に声をかけていた。

彼女はすらりとした身体つきながらも豊満な胸と形のいい尻が魅力的で、あまり化粧つ気はないながらもかなり可愛い感じの人だった。ハンニバルの四歳年上の姉さんとクラスメイトだったとかいう会話から推測した限りでは、二十一かそのくらいということなのだろうが、俺たちと同級生に見えないこともない。

いわゆるハンニバルのストライクゾーン、学生時代は教室の隅で地味に本を読んでいるようなタイプなのだが、連中と違うところは彼女が美人だということだ。

着飾れば、この世の春を謳歌できるだろうに、どうしてキャラクターTシャツによれよれのパンツ姿なのか、それでもなお清楚で可愛く見えるところが何とももったいない。

「ええ」

女は頷き、ハンニバルに対して微笑んでいたが、あまり他意を期待できそうもない儀礼的な笑顔だった。ハンニバルが先刻から一生懸命働きかけたり、あからさまなほどの熱視線を彼女に向けていることは随分対照的だ。

と言うか、ハンニバルがこういう顔や態度を取るなんて俺は初めて目の当たりにした。何と言うか、こいつって実は情熱的な奴だったんだな。

彼とはガキの頃からの十年以上のつきあいになるが、女に対してこ

んな積極的なハンニバルは初めてだった。あんまり興味深いので、俺は何気なさを装って二人のやり取りを凝視していた。

中でも面白かったのは、盛りのついた高校生に絡まれた困惑を隠せないながらも、間を持たせるための会話を提供する彼女の言葉に、あり得ないほどの食いつきのよさを見せるハンニバルの態度だった。

「ここのトマトバーガーが好きなの」

「俺も好きなんだ」

「フィッシュフライも」

「そう、フィッシュフライもだ」

「安くて、美味しいものね。忙しくてお昼を買出しに行かなくちゃいけないときなんか、お昼代を浮かせるのにもちょうどいいのよ」
「買出しに来たのか？」

「ええ、そう。今は夏休みなので、弟たちのお昼を考えなくちゃいけないのが大変。兄と二人なら、焦がしたスポンジにシロップをかけたものでもいいんだけど」

「大変だね……」

「ええ」

「ああ、だったら、俺がここの支払いをこちそうするよ。

今日だけじゃなくて、これからずっと。そのことを店主に言うからおからさ」

ハンニバルは好意で言ったのだろうが、その申し出に彼女は少し戸惑ったようだった。まあ確かに、高校生に今後の店の支払いを奢ると言われても普通は困るだろうな。

「いえ…、いいのよ。大丈夫」

彼女は答えた。

「遠慮しないでいいよ」

ハンニバルは、どうにか彼女に取り入りたくて必死の様子だった。

「ミカンさんの役に立ちたいんだ」

「ありがとう。でも気持ちだけで充分よ」

「どうして遠慮するんだ？ アマリアとあまり仲よくなかったから？」

「そういうわけじゃないわ」

「だったら奢らせてくれよ」

「だって、貴方にそうして貰う理由がないわ」

「でもミカンさんの家は貧乏で、金に困っているんだらう？」
「……」

俺は彼の友人として、この失態を何とフォローすべきか思案しなければならなかったが、その方法が思いつかないほどの失態であることは言うまでもなかっただらう。

金持ちの坊ちゃんの無邪気な発言、そもそも湯水のように小遣いを貰えるハンニバルには昔から、金持ちであるがゆえの常識の欠落したこれらの発言がしばしば見受けられたのだが、しかしたとえそうしたことゝ勘案するにしても好きな女に対して選択すべき言葉じゃないことは明らかだった。ミカンさんとやらは固まっていた。そりゃそうだらう。

「お金には困っているけど……」

しばしして、まるで貧乏だから服が買えないということを喧伝しているかのようなよれのキャラクターTシャツを引っ張りながら、ミカンさんは本当に困り果てたような顔でそう答えた。

「でも……」

俺は同情を禁じ得なかった。それがたかだか高校生に自尊心を踏み躪られたミカンさんに対してか、それとも最初から大して発展する可能性がなさそうだった恋が確実に駄目になりそうなハンニバルに対してかは分らないが。

「大丈夫、お財布の中は足りているから……」

ミカンさんは、ハンニバルの失言に声を荒げて怒り出すわけでもなく、さもなければ酷い侮辱に対して泣き出すわけでもなく、そう言っただけで店を出て行った。あれがマルガリータなら、暴れまくって店内を幾らか破壊しかねないという現実を思うとき、俺は結婚するならああいう優しい女の人がいいなあなんて他人事のように思った。実際他人事なんだけど。

「俺なんかまずいこと言っただけかな!？」

その後、ハンニバルは縋るような顔で俺を見た。

「んー、まずいこと言っただけでことに無自覚なことが相当マズイ」

俺は答えた。

「ハンニバル君の片想いは終了の予感」

「なんでだよ、理由を言え!」

「チーン。ハンニバル君がバカなせいで終了しました」

「フォレストツ、この野郎っ!」

そしてハンニバルは俺の胸倉を掴みかけたのだが、しかし、天はま

だ彼を見捨ててはいなかったのだ。

間もなくコック帽を不自然なほど目深に嚴重に被ったバンクさんが、持ち帰り用の紙袋を用意してカウンター前までやって来た。彼は少し辺りを見まわしてから、さっきまでミカンさんと立ち話していた俺たちに向かって言った。

「あら？ ミカンちゃんは？」

第4話 親友の裏切り

バンクさんの手からトマトバーガーの入った紙袋をもぎ取って、支払うべき代金の十倍近い大きな紙幣をカウンターに叩きつけて、ハンニバルはミカンさんを追いかけた。こんな口実がなくなつて、さつさと追いかけて謝ればいいと思うのだが、恋する男子というのは、あれで何やら心中複雑なものらしい。

本日は晴天にして強風、午後からは軽めの砂嵐が吹き始めていて、徒歩での移動は困難な天候となりつつあった。俺たちはバーガーシヨップを飛び出して間もなく、手ぶらで帰途に着くミカンさんの後姿をすぐに視認することができた。

彼女は初見からしてあまりしつかりしたタイプには見えなかったのだが、案の定、昼飯を買いに来て昼飯を忘れて帰るというかなり重症のドジ娘のようだった。これがドブスなら痴呆症かとても言うてやりたい気がしないでもないが、可愛い娘には何となく度量が広くなってしまうのは、いつの時代も男の性というものである。

ハンニバルよりも短い茶色のボブヘアを押さえながら、ときどき風のせいで立ち止まるミカンさんの尻の形が、やっぱりなかなかいいと俺は思った。

まあ、ハンニバルの背中を追いつながらこんなことを考えているのは、ミカンさんの性格はどうやら随分優しい感じがしたので、忘れ物のハンバーガーを届けてくれたことで、さっきのハンニバル君の失言も、笑って許してくれるんじゃないかなという気がしていたからだ。何しろ俺には姉がいないので、年上の女性に対する憧れみたいなものがこの判断には多分に介入していることは否定できないが、しかし俺の母親も結構そういうタイプで、どうしようもない親父の憎まれ口なんかを笑ってかわしたりしているので、大人の女っていうのは結構そういうもんなんじゃないかと思うわけだ。

ほどなくして俺たちは先を行くミカンさんに追いついた。ハンニバ

ルは当惑の表情を浮かべる彼女にハンバーガーの詰まった紙袋を押しつけた。もつと渡し方があるだろうと俺は思ったが、普段の取り澄ましたハンニバルとは違う、愚かで哀れなハンニバルを見られるというのも、なかなか楽しめた。

ハンバーガーの紙袋を受け取ると、ミカンさんはそこではじめて自分の失敗に気がついたのだろう。自分のこめかみをこつんと叩いた。

「ああ、わたししたら、どうしてこうなのかしら」

それからハンニバルと、俺にも視線をくれた上で、にっこり笑ってこう言った。

「届けてくれてどうもありがとう。これを忘れて帰ったら、何のために外出したのか分からないところだったわ」

「あの、さつき俺……」

自分の言ったどの言葉がミカンさんを傷つけたのか、たぶんハンニバルは大して分かつちやいないんだろうが、それは少なくとも反省しているようには見える態度だった。

「いいのよ、気にしないで」

ミカンさんはそう言ってうなだれるハンニバルを見上げ、ほとんど俺の予想した通りに優しくハンニバルを許した。

それで、この昼下がりの出来事は何事もなく収束を迎えるかに思われた。たぶんミカンさんはハンニバルのことを恋愛対象としては見ていないだろうし、これからもそうなることはないと思うが、二人の関係は意外と友情としては続くかもしれない。それよりも俺は、これから「B & R」に引き返して、注文していたチーズバーガーとビッグベーコンバーガーとコーラとポークナゲットを食べた後の午

後からの時間の過ごし方について頭の中であれこれ予定を立て始めていた。

この砂漠地域では強風の日以外で遊ぶ子供はほとんどおらず、夏休みともなると普段行くゲームセンターもショッピングセンターも暇を持て余したガキどものたまり場となる。家の中や公営プール、学校や企業の体育館、各種図書館、地域のコミュニティー会館なんかが学校推奨のたまり場だが、そんなところに行くのは小学生かバカだけだ。

ちよつと遊ぶっていうことを知っている奴なら、迷わず歓楽街のほうへ足を向ける。バーとか、カウンターつきのダンスフロアなんか立ち入るには二十一歳以上の証明書が必要になるが、うらぶれたカードハウス辺りは穴場だ。柄の悪い店の連中は、まさか賭場に高校生が紛れ込んでいる可能性について考えてみることもすらないだろう。しかも店内は大抵が暗がりだから、大学生だと言って酒を頼むこともできるのだ。

しかしハンニバルが予想外の態度に出たことで、事態は一気に急転した。

ミカンさんの悲鳴のような声がして、俺は一瞬にして現実を引き戻された。

「イヤッ……」

俺が見たのは、何をしようとしたのか知らないが、ミカンさんが泣きそうな顔でハンニバルの手を払い除けるところだった。

「触らないで、そんなことをしようとしなないで！」

「どうしてだよ。前は嫌がらなかったのに」

「それは貴方が泣いていたからよ。悲しくて、泣いていたから……それに子供だったからだわ」

「違う、もう子供なんかじゃなかったさ！」

年下だつてことは認めるけど子供じゃない……、それはミカンさんが誰よりもよく知っているはず」

するとミカンさんは顔を真っ赤にして、それから何を思ったのか今度こそ俺たちの前から逃走するべく走り出した。

何やら軽いラブコメの予感がした俺は思わずにやついてしまったが、しかし、学内の陸上部員につけ狙われるほど運動神経もいいハンニバルは、あっさりミカンさんに追いついた。

彼はミカンさんを掴まえると、彼女を強引にその腕の中に抱きすくめた。ミカンさんは最初しばらくは抵抗を示していたが、しかしハンニバルのかい身体に閉じ込められて身動きが取れないことを諦めたのか、やがて彼女の腕はだらんとし、それからハンニバルの背中に改めて彼女の白い腕が這わされた。つまり、彼女が自分からハンニバルを抱きしめたということだ。

それは傍目から見て、まるで愛し合う恋人同士であるかのような抱擁だった。

俺は、二人の身体のあの密着具合は、既に男女の深い間柄になるための行為を済ませた者同士でなかったら成立し得ない抱擁であるような気がして、その意味で愕然としていた。

ハンニバルの奴……、自分だけ、食べ頃のアんな美人と……？

勿論真相は分からない。今夜にでもこれらの経緯について、ハンニバルを電話で問い詰めてやらなければならぬことを決意する俺だったが、しかし、もし俺が憧れの近所の美少女であるカレンちゃんとハグする機会があったとしても、せいぜい彼女の肩に触れるのが精一杯だつていうことがこの疑惑の根拠として非常に強力に作用していた。何しろカレンちゃんの胸や下半身があんなふうに分身の身体に押しつけられたりしたら、俺だったら絶対正気なんか保つてられないだろうからだ。

それなのにそれを平然とやってのけるあいつら……、つまりあいつらときたら十中八九、大人になるための階段を、のぼっちまってい

るってことだ！

第5話 従姉のマルガリータ

夜になっても親友の思いがけない裏切りに、くさくさした気分を拭えないでいた。

確かにハンニバルは外見からして未経験だなんて信じられない風貌をしているが、奴に彼女がいたためしがないってことは、子供の頃からつきあっている俺は誰よりもよく知っている。隠し事をしようたって、できやしない距離感が俺たちの間にはあったのだ。それなのに実際はあんな年上の恋人がいたなんて、俺だけがガキのままだなんて、これはあんまり酷い裏切りだった。

その夜は週に一度、家族ぐるみで一緒に夕食を取るティム伯父さんの一家が家に来ていて、もうお互い子供たちはでかくなっていたというのにまだ昔みたいな馴れ合いを希望する両家の親たちの眼差しに辟易しながら俺は不機嫌に夕食を済ませた。

ティム伯父さんのところは、長女のセーラはもう町から遠く離れた大学に行ってしまったているから、来ているのは次女のマルガリータ、後はガキの弟妹。うちは兄貴のフードと俺、それから年の離れた末の妹っていう兄弟構成で、俺は兄貴とはもとから仲が良くないし、ましてや女やガキどもと話すこともないので、相変わらず実につまらない食卓だった。

早々に自分の部屋へ引きこもって、ハンニバルに件の事情の詳細を聞き出そうと思うも、電源を切られていて繋がらない。

そこへマルガリータが勝手に俺の部屋へ入って来たのだが、意思の疎通もそこそこに、マルガリータの飛び蹴りが華麗に俺のみぞおちに決まり、体勢を崩して倒れ込んだ俺は更に悪いことに後ろの壁面に頭を強打するはめになった。

咳き込み、呼吸が上手くできずに喘ぐ俺を見下ろしながら、マルガリータは両手を腰に当てた格好でここのたまった。

「いい気味！ 人の恋路を邪魔するからよ！」

「ゲホゲホッ、この男女が……」

「違うわ。単にあんたが弱すぎなのよ」

冗談じゃない、昔ならともかく、幾ら何でも今なら腕力で女に遅れを取るわけはなかった。だが、男が女を本気で殴ったらシャレにならないってことくらい心得ているんだ。俺はおまえに大いに手を抜いてやっているんだということを訴えたい気分だったが、そんなことをしたところで負け犬の遠吠えとか言われるのがおちだろうから黙っていた。

「そんなことより、ねえ、大事な相談があるの」

たった今、俺に飛び蹴りをかましたことなどまるでなかったかのような顔をして、マルガリータはそう切り出した。

「相談？」

どんなことかはだいたい見当がついていたが、分からないふりをして俺は聞き返した。

「ハンニバル君のことよ。」

あたしが彼を好きだってことを、クラスの女子で知らない子はいないわ。夏休みが始まる前に、みんなに言いふらしちゃったんだもの。まさかあんなにまで話が伝わっているとは思わなかったけど、このままじゃあたし、学校が始まる頃にはみんなの笑い者になっちゃうわ」

マルガリータが誰を好きかなんて、態度を見ていればバレバレなんだけど、交際の成立もしていない相手を好きだなんてことを自分か

ら誰かに話すなんて浅はかさは、我が従姉ながらなんという馬鹿さ加減かという気がした。

何か行動を取る前にあまり物事を深く考えないのは、マルガリータの長所でもあり欠点でもあった。あっけらかんとしているようで、後からこうやって後悔したり悩んだりするのはいつものことなのだから、いい加減学習したらどうかという嫌味が脳裏に浮かんだが、彼女の思いの外深刻そうな表情が、それをからも押しとどめさせた。

「ねえフォレスト、正直に言っつて、彼つてあんまり脈なさそうな感じなのかな……、話しかけても嫌な顔をしないし、勉強教えてつて頼んだときも結構親切だったし、あたしだったら彼とお似合いだつて周りに焚きつけられて、つい調子に乗っちゃったのよ。」

でも今日ね、ふと、もしかしたら彼には他に好きな人がいるんじゃないかと思って思ったの。

だってね、そうじゃなかったら、ううん彼女がいたとしたつて、大抵の男子がこのあたしに誘われてよろめかないなんてことはないはずだもの。少なくとも、これまでにはなかったことだわ」

「うーん、まあ、おまえの言いたいことは分からないでもないよ。でもさ、疑問なのは、なんで今更ハンニバルなの？」

おまえつて、確かに聞いているとちよつと自信過剰かなつて気はするけど、確かにその自信を裏づけるだけの顔はしてると思うし、実際もてるんだろ？

大学生の恋人が複数いるつて話、つまり、卒業した上級生と今でも続いているつて話も聞くんだけど、それが本当のことなら、同級生なんかより大学生とつきあつてるつてほうがおまえにとってずっとよくないか？

それとも、ここはこんな僻地だし、やっぱり遠距離恋愛なんてそう続かないものなの？」

するとマルガリータは、少し考え込むかのような姿勢をとった後、俺の反応を窺うような上目遣いで俺を見た。長い睫毛と、青い瞳と、白い肌。今夜は親と同伴ゆえの薄化粧と、丹念に巻いた金色の髪もあいまって、そのときのマルガリータはこっちが驚くほど可愛く見えた。まるで彼女がいつもの凶暴なマルガリータではないように思えて、少々混乱を覚えたほどだった。

「フォレストが、ハンニバル君の友だちだから白状しちゃうとね」「うん」

「あたし、確かに何人かに告白されたことはあるけど、誰ともつきあつたことなんてなかったのよ」

「え…、そうなんだ？ そりやまたなんで？」

「なんでって、だって、自分が好きじゃない相手とつきあつて何が楽しいの？」

それに、うちのママが娘たちにいつも言っていることは、結婚する人以外とはしちゃいけないってことなの。つまり、セックスのこと。本当に好きな相手に出会つたとき、絶対後悔するからだそうよ。

言っている意味はいまいち分からなかったけど、ママが言うことで間違つていたことはこれまでなかったし、あたし、今のところはそれを守ろうと思ってるの。けどつきあつたら、やっぱりそういうことって断り難いと思うし……」

「そ、そりやそうかもな」

「あたしに告白して振られた人が、さもつきあつてるみたいに言いふらしちゃつたことが、こんな噂が広まつた最初だったかな。

みんなあたしが遊んでるっていうふうに思いたいみたいだし、実際そういうことで他の人より上に見られるのが気持ちよかつたら、何となくそういうことにしておいたのよ。

だけど本当は、みんなが思っているようなことはまだないのよ」

「人は見かけによらないもんだな。俺はてっきり、おまえが相当のあれだと思つてたよ。」

そんなんだったら、おまえの姉さんみたいに、いつも清楚な格好していけばよかったのに」

「駄目よ。そんなことをしたら、他のグループの連中になめられて惨めな思いをすることになるじゃない。常にクラスで優位な立場でいるためには、強い女を演出しなきゃ」

「でもそうしていたらハンニバルに庇って貰えたかもよ。あいつほんとにおとなしい女が好きだからさ。おとなしいっていうか、地味な女」

「そうね。そんな気はしていたわ……」

第6話 狭い我が町

俺の母さんが、食後にと行って手作りのケーキと珈琲を持って部屋を訪れる頃、俺はマルガリータの純情を痛いほど感じ取っていた。昼間あったこと、ハンニバルと年上のミカンさんのことを、マルガリータに洗いざらい打ち明けてしまふべきかどうか悩んでいたのは、たとえ俺に飛び蹴りを食らわすような奴でもやっぱり身内であるマルガリータのことを大事だと思うからだ。

勿論、打ち明ければ、どういうことになるかは分かっていた。思っていたよりずっと身持ちが固く堅実な考え方をするとしても、マルガリータの勝気な性格が生来のものである以上、彼女が黙って引き下がるなんてことはあり得ない。最悪学校での振る舞い通り、手下の女子たちを引き連れて、ミカンさんに手を引けなんて脅しをかけないという保障はどこにもないわけだ。そんなことをしでかせば、確実にハンニバルに嫌われるだろうという計算ができないわけじゃないんだろうが、それでもそれをやりかねない奴だということは分かっていた。

だけど、確かにハンニバルとミカンさんがお似合いでないとは思わないけど、ミカンさんには何も恨みなんてないけど、マルガリータとミカンさん、どちらかの味方をしなければならなかったら、俺が選ぶのは考えるまでもなく身内であるマルガリータだ。

「手作りだから、形はちょっと変なんだけど、たぶん味はいいと思うから食べてね」

うちの母さんが、マルガリータにケーキの皿を渡しながらそう言った。

「いえ、叔母さんが作るケーキは美味しいから、いつも楽しみにし

ているの」

マルガリータは、お世辞ではなく本当に嬉しそうな顔をしてそれを受け取った。

俺とマルガリータはお互いにカーペットに直接座ってだらしなく話をしていたから、俺たちはケーキを受け取るとそのまま床の上でそれを食べ始めた。正直、母さんの作るケーキは美味い。店売りのケーキの倍はあるつかという大きな生クリームの塊が、うっかり床に落ちないかということに気にしながらも、俺たちはしばらく黙って食べることに熱中した。

「ほんと、あんたのママって料理上手よね。
毎日こんな美味しいケーキが食べられるなんて羨ましいわ」

皿の上のケーキをほとんどたいらげてから、マルガリータはやっと口を開いた。

「善し悪しだぞ。器用だけどセンスはないから飾りつけは毎回変だし、たまに新メニューを考えたとか言って、何だろうと見たら、ニンクが丸ごとケーキに乗っていたりする」

俺は答えた。

「ニンクかあ。ニンジンとかならありそうだけど」

「たぶん、自分はセンスがあって独創的だってことを家族に主張したいんだろうが、どんなに料理の腕が上達しても、料理本通り作るべき人間ってのはいるんだよな」

「でも、いいじゃない。被害は家族にしか出ていないんだったらさ。それにそれを毎回やるってわけじゃないんでしょ」

「まあね」

「それより変なケーキと言えば、あのお店知ってる？ 五番街通りのケーキ屋さん」

「いや、知らないけど」

「そこって、ケーキの味はまずまずんだけど、やっぱり形が変なのよ。変って言うか、ダサい感じ。作ってる職人さんにセンスがないってことがよく出てるの。」

「都会じゃまず売れないだろうなあって思うんだけど、この町にはケーキ屋さん自体が少ないから、何とか経営できてるって感じの店なのよ」

「ふーん。まあ俺は、ケーキは買ってまで食おうとは思わないからなあ」

「でも、その店が有名なことと言ったらね、ケーキよりは、別の話でなの」

そこでマルガリータが不意に声をひそめたので、たぶんよからぬ悪口か何かなんだろうと俺は思ったが、案の定だった。

「そのお店は、もともとマフィアの愛人がやってるお店だったんだけど、今はその子供たちがやっているの」

「へえ、そいつはまた」

「実際、その店をやってる長男ってのがまたチンピラみたいな奴だね。顔はいいんだからエプロンでもして愛想笑いのひとつもしていれば、奥様たちのアイドルになれそうなものなのに、終日レジのところで、胸の開いたシャツに金のネックレスなんて服装で凄んでるんだって。それで余計に客が寄りつかないってことを分かっていないのよね」

「うーん。ま、俺にしてみればどうでもいい情報だな。」

とはいえ、客が寄りつかないのになんでおまえはそんなこと知ってるんだ？

分かっていると思うが、妙な世界に首を突っ込むもんじゃないぞ」

「分かってるわよ。あたしのチアリーディングのチームの一人にピーチって子がいるんだけど、その子の家だからちよっと知ってるだけ」

「そんな物騒な奴とつきあうなよ」

「擦れているのは認めるけど、そんなに悪い子じゃないのよ」

少しして、珈琲のおかわりを持って来た母さんが、そのついでを装ってマルガリータに進路についての質問をした。勿論、俺がいるってことを意識した上で、わざわざそんな話題を振ったことは分かっていた。

「進学を考えています、って言うか、パパがそうしなさいって。学者の娘が大学に行かないと、世間体が悪いからと」

マルガリータは少々澄ましてそう答えた。

母さんは相槌をうった。

「そうよね、マルガリータちゃんのパパもうちのパパも学者さんだから、やっぱりでできればそうして欲しいのよ。」

でも、わたしたちは何も強制しようとしてそう言っているわけじゃないのよ。ただ親としての希望を伝えているだけのことだ」

「ええ、分かります」

「フォレストにも随分そう言っているんだけど、それなのにこの子ったら、もう何ヶ月もこうやって意地を張っているの。」

進学するのが嫌なら、何か他に自分のやりたいことを決めて、そのことを頑張りなさいって言っても、考えていることを何も言わなくて困っているの。好きなギターを頑張りたいたいならそれでもいいのに言わないのよ」

母さんが、俺に対して聞こえよがしに言っているのが分かりやす

ぎて、怒る気にもならなかった。俺は別に、ただ今はまだ将来のことなんて考えたくないだけなのに、そのことを理解しないことが頭に来るんだ。

でも、母さんのことを嫌いなわけじゃない。

親父のことだって、別に嫌いってわけじゃない。相当苦手ではあるけど。

母さんが部屋を立ち去った後で、マルガリータは不思議そうな顔をして俺を見た。

「あんたも変な奴よね。フォレストみたいな適当な奴ほど、執行猶予とばかりに大学に行きたがるもんだと思うのに。」

もしかして、勉強についていけないかもと思ってる？

でも大学って、今どきぬるい試験で誰でも入れるわよ。入ってからことは知らないけど、少なくともバカのあんたでも余裕で入れるわ。出るのは大変そうだけど」

「うるせーなあ。俺はただ、誰かの思い通りにはならないんだよ」

「ああ、なるほど、分かったわ。」

あんたパパと仲悪いもんねえ、要するに、何となく逆らいたいだけなのね。

あんたには何か胸を張れる特技とか、あんたのパパを唸らせるだけの将来への展望なんてなくて、本当は何も考えてないだけなのにそれを認めるのも嫌で、だからと言ってパパの言いなりになるなんてもつてのほかで、それで突っ張っちゃってるってわけね」

「う…、うるせー馬鹿」

「馬鹿!？」

「ああ、そうだよ。マルガリータ、おまえはそうやって余計なことを言う可愛くない性格だから、ハンニバルの眼中に入れないんだよ。女なら、もっとしおらしくしてる。」

ルックス的にはハンニバルの女に負けてねえし、若さじゃ勝ってるのに、相手にされないってのはおまえがどうしようもない生意気な

女だからだ。

いいか、男つてのは基本的には……」

マルガリータの顔色が変わったことで、俺は自分がいま口走った内容に気づいた。

「ハンニバル君の女？」

マルガリータが俺に事の経緯を吐かせるために、何かプロレス技をかけようとしてゆらりと立ち上がりかけているのが俺には判った。

第7話 思いつきこそが行動規範

「あら、フォレスト。出かけるの？」

マルガリータに引きずられるようにして玄関を出ようとする俺を、母さんが呼び止めた。

「あ、ああ。ちょっとコンビニに……」

「今夜は風が強いから、暗くなっているのに外出するのは危険だね。明日では駄目なの？」

「急ぎの用なんだ」

「じゃあママが車を出すわね」

そう言つて、まるで幼稚園児のつき添いをするような調子で母さんまで一緒になつて出かけようとするのを、強引に玄関の扉を閉めることで遮つた。ドアの向こうで母さんが喚いていたが、言っている内容が酷すぎて聞いていられなかった。

「フォレスト！？ だめよ、子供だけで出かけるなんて。」

帰り道が分からなくなつたらどうするの？ 迷子になっちゃうのよ！？」

「……勘弁してくれ」

俺の母さんは優しいんだけど、俺がもうガキじゃないってことを親父とは別の意味で理解していない人で、要するに過保護な人だ。兄貴みたいな内気な男にとっては、ああいうのが居心地がいいのかもしれないが、俺にとっては甘つたるすぎてときどき叫び出したい気持ちになる。近頃じゃもう、息苦しくて耐えられないんだ。

「うちのママも大概だけど、あんたのママもかなり重症ね」

先に行くマルガリータが笑っている。

そのまま、俺とマルガリータは連れ立って砂混じりの風の吹く夜道を歩き出した。こんなときにバイクがあったら便利なのに、未だにバイクを買ってくれない親父のことを内心で恨みながら、目指すは七番街のハンニバルの家だ。

あの後マルガリータに電気ショックと称して股間をぎゅうぎゅう踏まれることによって、俺はすべてを白状していた。知っている限りのことを。つまり今日出くわしたハンニバルとミカンさんに関する一部始終を全部だ。

だけど、意外に気分は悪くなかった。それから結構わくわくしていた。要は面白ければ何でもいいんだよ、俺って人間は。

ハンニバルの家っていうのはこの町の有力な地権者で、代々学者の家柄で、俺が知っているだけでも彼のお祖父さんは著名な科学者、彼の母親は大学教授、という具合だった。広義には同業者とは言っても、うちの親父のような貧乏研究員なんかとは桁の違う金を容易に稼ぐことができる身分なんだろう。

そもそも土地を持っているんだからあくせく働かなくてもいいところを、趣味のような研究職が高じてしまったとかいう話を謙遜話としてハンニバルに聞かされたときにはかなりやりきれないものを感じたものだが、とにかくハンニバルの家は、この砂漠の町には数件しかない豪邸のうちの一つだった。

外壁の向こう側に広がるハンニバルの家の庭の緑地と噴水を見て、

マルガリータは目を輝かせているが、何しろこの乾燥地帯では芝生を保つにも相当の財力が必要だからだ。幾つかの噴水が無駄に噴き上げているあの水だって、この砂漠の町ではタダなんかじゃない。ガソリンよりもずっと高価なものなのだ。

「すごい！ ハンニバル君って、本当にお金持ちなのね」

まるで貴族の城にあるような高くて立派な石壁の合間に、僅かにある鉄格子の隙間を覗きながら、マルガリータは分かりやすい歓声をあげた。

「そうだね」

「こんな家に住めたら素敵だろうなあ」

「だろうね」

「何よ。感動のない奴」

「だって俺は何度も来てるからね」

「あ、そうか」

「で、どうすんの？」

俺が言うと、マルガリータは拳を握り締めて宣言した。

「……勿論、告白するわよ！」

「断られたら？」

「押し倒してでもものにするっ！ 年上の女なんかには負けるもんですかっ！

あたしがもう後には引けないってこと、あんただって分かってるんでしょ？

相手がチアリーダーのチームのメンバーの姉さんだって言うなら、あたし、どんなことがあったって負けられない。絶対に出し抜いてやらなくちゃ。

だつてもしピーチが自分の姉さんとハンニバル君がつきあっているなんてことを誰かに漏らしたら、あたしが学校で築き上げて来たキヤリアはどうなるの？ このあたしが男の子に振られるなんて、そんなことがあっていいことだと思う！？

そんなことにもしなったら、どんなときだつてクラスの人気者で、皆の羨望の的であるあたしの人生はおしまいよっ！

だからこうなったら、色仕掛けでも何でもして、絶対彼のこと落としてやるっ。

ハンニバル君が初めての相手なら、あたし、悔いはないもんっ！」

「いいだろうマルガリータ。突撃するからには死力を尽くせ。たぶん駄目だと思うけど……まあ、骨は俺が拾ってやる」

そして俺は正面門のところにあるインターホンを押した。間もなくして聞こえてきたのは優しそうな女の人の声だった。聞き慣れた声。ハンニバルの母親の声だ。

「フォレスト君と一緒にだとはかり思っていたんだけど……まだ帰って来ていないのよ」

インターホンは言った。

俺はマルガリータと顔を見合わせた。

「ハンニバル君、いないって？」

「うん」

第8話 友人の家庭事情

ハンニバルの母親は、礼儀知らずにも夜の九時過ぎに訪問した俺とマルガリータを、嫌な顔ひとつせず豪邸の二階のハンニバルの部屋に通してくれた。

図体のかいハンニバルの母親らしく、彼女は女性としては大柄だったが、決して太っているというわけではなく、どちらかと言えば骨太といった感じだった。それに清楚で優しい雰囲気をしていて、その点はあるミカンさんと非常に重なり、俺はマルガリータの分の悪さを実感せずにはいられなかった。

「ハンニバルは無断で外泊をしたことはないし……、たぶん、じきに帰って来ると思うわ。ゆっくりしていつてね」

ハンニバルの母親は、見るからに高級そうなケーキやら冷たい飲み物やらを俺たちに用意しながら、そう言って微笑んだ。

それに改めてよく見ると、ハンニバルの母親というのは雰囲気だけじゃなく、控えめな微笑み方とか、髪の色合いまでがミカンさんと似通っていて、俺は何とも言いづらいハンニバルの秘められた願望と言つか、性癖と言つか、まあありていに言っちゃうとマザコンチックな女の趣味を思い知らされた思いがした。

「ああ、本日二個目」

嬉々としてケーキを頬張るマルガリータをよそに、俺は冷たいジュースを飲むのが精一杯だった。俺は自分が小食な男だと思っているわけじゃないが、ケーキみたいな甘ったるいものを腹いっぱい食べるなんてことは、ほとんど苦行に近いことのような気がする。

俺の分のケーキを無言でマルガリータの席のほうへ動かし譲ってや

る頃、部屋の扉が開き、子供の個人部屋としては信じられないほど
広くて贅沢な部屋の中に、黒尽くめのいかにも柄の悪そうな女が入
って来た。

ハンニバルが帰って来たのかと思い、弾かれたように顔をあげた俺
としては、正直視線をどこにやったらいいのか分からない気分にな
せられるほど、その女の胸の辺りはぱっくり開いていて俺は早朝の
駅の挙動不審者のように視線を彷徨させた。

暑い夜のこととはいえ、かろうじて胸の先端が隠れているというだ
けの服装で外を歩ける女の神経は度し難い。男たちがどんな目で自
分を見ているかということを知っているならなおさらだし、知らな
いのであればご愁傷様という意味だ。

「あれ、フォレスト君じゃない。あれえ、隣にいるのは彼女かなー
？ 可愛いわねえ」

少々酔っ払っているその柄の悪そうな女は、ハンニバルの姉さんの
アマリアだった。

化粧が濃いだけでなく、不良娘たち特有のあのどぎついメイクは
なんて言うんだ？ とにかくあの清楚な母親から生まれたとは到底
信じられない擦れっぷりである。

彼女が随分前からこのようにぐれていることは知っているが、それ
以前はいかにも金持ちの家のお嬢さん風だったのを知っている者と
しては、この変化はやはり見ていてつらい。

金持ちの家に生まれ、豪邸で暮らして、親には社会的な地位があり、
しかも献身的で優しそうだ。何ひとつ不自由なことなどない人生だ
ろうに、何が面白くなってこんなふうになってしまったのだろう。

そのことについて彼女にインタビューしてみたいと、俺は彼女を目
撃するたびに常々思っているのだが、実際そんなことを聞いたら余
裕で殴って来そうな気がするので今回も自粛しておいた。

可愛いと言われたことで気をよくしているマルガリータの単純さを

横目に、俺はソファに腰かけたままアマリアを再び見上げた。

「いや、彼女じゃないけど……あの、ハンニバルが何処に言ったか知りませんか？」

「あー、帰ってないんだ。部屋に灯りがついていたら、帰って来たのかと思って覗いてみたんだけど。じゃああいつ、泊まる気なのかな」

「泊まる？ 何処へ？」

「ん？ 言っちゃっていいのかな？」

それが傑作でね、あいつあたしの遊び仲間の妹とできてさあ、まあその妹はハイスクールの同級生だったんだけど、まずそもそもが

もったいぶって前置きが長い上に、酔っぱらいの要領を得ない証言を要約すると、こういうことだった。

五番街ケーキ屋でケーキ職人をやっているミカンという娘とハンニバルはできている。

アマリアはミカンさんのマフィア兄貴と友人で、本日、ハンニバルがミカンさんと店で会っているのを見かけた。よさそうな雰囲気ではなかった。

「つかミカンって人のお兄さん、ガチで悪い人なんですか？ 五番街のケーキ屋って、レジにチンピラがいるっていう店のことですよね」

「そそつ。悪い人って言うか、某組織の構成員かな。まあそんなところ」

「ほんとですか……。んで、ハンニバルはそのマフィアのお兄さんを持つミカンさんって人と出来てるってことなのか」

俺が言うと、アマリアは平然と頷いた。

「ええ、そうみたいね」

「なんでそういうことになったんだろ。あんまり接点なさそうなのに」

「ミカンはおかし、あたしの友だちだったのよ。あたしが自分に目覚める前のことだけど」

自分に目覚める前、と言うのは、恐らく清楚なお嬢様だった頃ということのようにだった。

「うちってお金はあるけど、家庭は崩壊しているも同然だからね。まず両親は正式に結婚してないし、親父はチンピラ。もつとも、世界一いかしてるってあたしは思うけど、うちの家風じゃないことは確かなのよ。」

まあドラマとかでよくある話なんだけど、生粋のお嬢様だったうちのママが、チンピラ男にのぼせちゃったのが運の尽きね。お祖父ちゃんとお祖母ちゃんがそんな男と結婚なんて駄目だって大反対して結婚させなかったまではいいんだけど、結婚しなかっただけでこっそりやることはやっちゃって、二人の間にはあたしを含めて子供が三人もいるし。

お祖父ちゃんが元気だった頃は、いつも猟銃を持ち出して親父と対決してたわ。親父がこの家に住み着くようになってからは、家の中が嵐みたいだった。

あんたも知っているでしょうけど、うちのママもお祖母ちゃんも育ちがいいから、外面をよくすることにいつもものすごく神経を使う人たちだからね。あたしもある時期この土地の名士の娘らしく、いつもきちんとして上辺を取り繕わないといけないことだけに集中していたわけ。

ハンニバルはそれで、寂しい思いをしていたのかもね。あんたはガキだったからまんまと外面が立派なことに騙されていたけど、ミカンはうちが本当は荒れてるってことに気づいたみたいでさ。だから

ハンニバルは最初、ミカンに甘えていただけだったと思うけど……、それがそのうちそういう方向に行っちゃったんじゃないかなあ。ほらミカンも兄貴がチンピラで、共通する苦勞もあっただろうから余計にね」

「そんな事情があつたのか」

俺が言うと、アマリアは唇を微笑みの形にして頷いた。

「そつ。だから、今夜はお泊りかなあつてね」

「それ、確かなんですか？」

しばらく蚊帳の外に置かれていたマルガリータが、慄然として言った。

その問いかけに、アマリアはもつと不満そうな顔をした。メイクのせいとか、それともマフィアのお友だちなんてのがいる反社会的なバツググラウンドが見えたためか、非常に怖いお姉さんの睨みは、正直俺ですら縮み上がるものだった。

「ええ、確かよ。何、あんたあたしの言うことを疑うわけ？ でもこんな嘘をあんたらについてもしょうがないし」

するとそこでマルガリータがいきなり席を立ち、そのまま勢いよく部屋を飛び出して行つたのだつた。やはりここで引き下がったり泣いたりするような気の弱さなんていうものを、マルガリータは持ち合わせてはいないわけだ。

これまでも対立する気の強いクラスメイトの女どもを、ぶっ潰すことで現在の権力を手に入れた女の氣迫と言うものは半端なものではない。もつともアマリアが更に怖かつたから、逃走したということもあるかもしれないが。

「彼女、どしたの」

アマリアが、マルガリータが飛び出して言ったドアを指差して言った。

「ああ、んと、あいつは実はハンニバルに会いに来たんだ。つまり俺の彼女じゃなくて、マルガリータはハンニバルに惚れてる」

「ああ、なるほど。そりゃお泊りなんて聞いたら……、ぶち切れだわね」

特に悪びれるでもなく、ため息混じりにアマリアは言った。

第9話 五番街

定期的に街灯が行く手を照らしてくれているとはいえ、風の強い夜に五番街くんだりまで出かけて行くのはそう容易なことではなかった。

けれどもマルガリータが本気でどんどん先を歩いて行ってしまうので、治安のいいとは言い難いこのイーストオアシスの夜道を、まさかあいつ一人で歩かせるわけにもいかない。

こんなことなら最初から素直に母さんの車に乗せて貰えばよかったと、砂利の入ったスニーカーにイラつきながら俺は密かに後悔していた。

五番街はこの町の所謂メインストリートに面しているのだが、五番街と言えばちよつとした悪の巣窟、つまり一般的な住宅地区じゃなかったのだ。

イーストオアシスは都会から隔離されたような片田舎、と言うよりは、学者たちが砂漠の何だかを研究するために集まって作られた町だった。そこへ、利益を当て込んだ連中が飲食店だの何だのを作り始めて、学校ができ、企業も来た。けれども町として成立して日が浅いこの場所には、警察機関の進出が遅れていたせいなのか、マフイアみたいなのも、独自のネットワークで暗黒街を形成し始めてしまっているのだ。

ミカンとか言う女の兄貴が、地元マフィアの構成員だなんて話を思い出して、俺はちよつと気が引けていた。下手に出ていれば高校生相手に本気になることはないだろうと祈りたいが、分かっていうことは、とにかくマルガリータを適当なところで諫めて、無傷で帰宅させないことには俺が後でティム伯父さんに殺されてしまうということだ。

アマリアと一緒に来て欲しいと頼んだが、彼女は俺の嘆願を一蹴した。

「あんな馬鹿娘のために、なんであたしが骨折らなくちゃなんないのよ。人ん家に来て挨拶もなしに帰って行くなんて、盗人も同じじゃないの。いったいどういう教育をされているんだか」

基本はお嬢様のアマリアが眉を顰めていた。

「どうせハンニバルがミカンといるところを見て、泣いて帰ることになるんだろうから、三十分で事足りる用事でしょ？ あたしは酒を飲むのよ」

砂漠の町特有の大掛かりな日除けに、立ち並ぶ商店の軒。商店街用の商標つき街灯。オアシス高のチアリーディングチームを宣伝する看板もあった。

五番街の多少は商店街らしい佇まいが、幾らか俺を安堵させた。まだ十時前なのでシャッターを開けている店もあったし、買い物客の姿も見られたからだ。

ちらほらとではあったが人影があるので、いざというとき悲鳴をあげたら、誰か大人が警察に通報してくれるんじゃないかというのは、甘い期待だろうか。俺は一応ポケットの携帯に、警察の緊急番号を用意してそれに備えた。

五番街の小さくて目立たない、何となく壁の薄汚れた建物が、件のケーキ屋のようだった。

店の窓からは明かりが漏れ、そっと覗き込んでみるとまだ営業中のような。店内のレジに、なるほど例のマフィア兄貴がふんぞり返っているのが見える。確かに胸をはだけさせ、金のネックレスをして

いる柄の悪そうな男だった。

チンピラが取りがちな威嚇なのだろうが、カウンターに足を乗せ、店の中でキーキを物色する客を、細かく見ている。だが睨んではないようだ。店の客は常連なのか、ときどき彼と会話を交わしていた。それに思ったほど迫力のある男ではなかった。中肉中背だし、何と言うか著しく童顔だったのだ。年齢はミカンさんの兄貴と言うなら恐らく二十代半ばくらいだろうが、下手をするとやっぱり高校生で通用しそうな子供っぽい雰囲気もあった。

そういう印象を、マルガリータとしても持ったのかもしれない。マルガリータは臆することなく店内に入り、そのマフィア兄貴のいるレジ前に行くと、いきなり言った。

「ミカンって女に会いたいだよ」

「ああ？」

けれども、顔は童顔だが、彼の態度はやっぱり怖かった。

マフィア兄貴が顔を歪めて凄んだので、俺はマルガリータに続いて店に踏み入れかけた足を止め、店に入るのをよそうかと思ったほどだった。

でもマルガリータは偉そうに両手を腰に当てて、まるで手下のクラスメイトたちを相手にするときのように気にせず続けた。

「ハンニバル君がここにいることは知ってるのよ。彼は何処なの？」

「ミカンって女と一緒にいるんでしょ？」

「あ？」

「彼に会わせて！」

愚かにも、マルガリータは悪い人を相手に声を大きくした。

「……、何だか知らんがなお嬢ちゃん。人様に物を頼むときは、そ

れなりの言い方ってものがあるんだぜ。最近のメスガキは、常識つてものを知らないのか？ え？」

するとマフィア兄貴は、カウンターの上に乗せていた足をわざとカウンターにぶつけて、物騒な物音を立てた。店内の客がまたかという顔をしながらレジから離れて行く。彼は機嫌が悪いと、見知らぬ女でも食っちゃうからねえなんて、囁かれているのが聞こえて俺は青ざめた。

見知らぬ男に恐い態度を取られて、さすがのマルガリータも自分の言い方がやばいということにようやく気がついたようだった。

俺は慌てて怯えて立ち竦むマルガリータの横に行って、マフィア兄貴にマルガリータの不躰のフォローをした。これだからマルガリータってのは後先を考えない馬鹿だと言うのだ。馬鹿には係わり合いを持つべきではないというのは、これは先人たちの知恵だ。いま適当に思ったただけけど。

けれどもどうせ厄介事になったら、女を置いて逃げるって選択はないだろうし、どうしたって俺がこの馬鹿を庇ってやらなければならぬので、先手を打って穏便にしたほうが百万倍ましだった。

俺は断じてハンニバルのコバンザメではないが、強情な親父と出来のいい兄貴なんていう、立てて貰って当然という顔をした連中と共同生活を送っている次男として、悲しいかな身についてしまっている処世術はあった。

「実は俺たち、さっきまでアマリアさんと会ってて」

マフィア兄貴を執り成すために、彼と友人だというアマリアの名前を出すと、兄貴はじろりと俺のを見た。

「アマリアに。それで？」

「俺はその、つまりハンニバルがここにいて彼女から聞いたん

です。俺たちハンニバルと学校の同級生で。今夜約束があつたのに、あいつにすっぱかされちゃって、それでちよつと話ができたらなんて。いやっ、いないって言うなら、俺たちあつさり引き下がりますし、こちら様のご商売の邪魔なんてしないんで……」

するとマフィア兄貴はふんぞり返つた姿勢のまま、俺の顔をしばらく眺めていたかと思うと、思っていたよりずっと筋肉質な太い腕をぬつと突き出した。彼が童顔のひ弱な男ではないことや、ケーキ屋のレジが本業でないことを確信させる、非常に強暴そうな腕である。おまけにご丁寧にも、タトウまで彫つてあつた。血管に歯向かうように入っているナイフの傷跡はなんだろう？ 彼は人殺しすらしたことがある男なのかもしれない。俺はそれでつきり横つ面を殴られるぐらいのことはあるかなと覚悟をしたが、彼は親指を突き出すとニヤリと笑つて店の奥の扉を示した。

「会って行け。厨房にいるはずだ」

「ど、どうも。お兄さん。ご親切に。そのネックレス、バッチリいかしてますよ」

第10話 クラスメイトへの告白

扉を抜けた俺たちは、一息吐くまでもなく次の現場に出くわした。このケーキ屋は建物自体が小さいから、ドアを一枚隔てたらすぐにそこがケーキを作る厨房だったのだが、そこでハンニバルとミカンさんが楽しそうに話をしている場面を目の当たりにしたというわけだ。

エプロンをして、粉まみれになって、業務用キッチンカウンターの上の生地のようなものをこねているミカンさんと、嬉しそうにやけて彼女の傍にいるハンニバル。それがパイか何かの生地だということは、料理好きの母親のおかげで俺にはすぐに分かったが、注目すべきはそこじゃない。いつも表情に影があつたあの陰鬱さは何処になりを潜めたんだという浮かれた顔で、心から笑っている奴の姿がそこにあつた。

もし、このときの俺が洞察の何たるかを知っていたなら、この表情だけで彼の探し求めていた幸福がこのキャラクターTシャツの女にあるってことを、理解することもできたのだろう。でも俺はまだ十七歳だった。

「あれっ、フォレスト。何？」

俺が咳払いをすると、マルガリータの存在なんか目にも入らなかったのか、ハンニバルは俺にだけ言った。

「えっと、まあ、その」

俺はマルガリータを指差し、苦笑いを作った。

「その女と別れて！」

マルガリータはまた、後先考えずに自分の欲求だけをこり押しすべく、悲痛な声でいきなりハンニバルに迫った。

「あたし、ずっとハンニバル君のことが好きだったの。ずっと言えなかったけど、高校に入ってからずっと……、だからあたしとつきあつて欲しいの。だからその女とは別れて！」

「俺？」

一方のハンニバルは自分を指差して、さして喜んでいるふうもなく言った。曲がりなりにもクラスで人気者の女子が自分に告白しているというのに、彼にはその価値が分からないらしい。

マルガリータは一生懸命になって頷いたが、ハンニバルはまったく状況が理解できないという顔をしていた。

マルガリータとハンニバルは互いにそのまま黙ってしまい、しばらく気まずい沈黙が続いた。

やがて気を遣ってくれたのだろう。場を執り成すように、キッチンにいるミカンさんがこちらに向かって笑って言った。

「遠慮しなくていいのよ。わたしたち、別につきあっていないから」

「えっ、そうだったんですか？」

珍妙な空気に冷や汗を掻いていた俺がその執り成しを拾うと、ミカンさんは頷いた。

「ええ。いったいどうしてそんなお話になっているの？ でも、そういう関係じゃないのよ。ハンニバル君はときどきうちに買い物に来てくれる常連さんだけ。

今もね、パイの作り方を習いたいって言うから、見て貰っていたのよ」

「ああ、そうなんですか」

それによって、俺は意外にもマルガリータの恋路が、叶ってしまうんじゃないかという気が一瞬したのだ。

しかしすぐにハンニバルが納得いかないという顔でミカンさんを見た。

「なんで？」

ハンニバルにとっては、マルガリータの渾身の告白なんか屁でもないということなのだろう。彼は目の前で告白したマルガリータが返事を待って震えているのに、それには目もくれずにミカンさんを覗き込んだ。

「なんでそんなことを言うんだ？ それはないだろう」

「えっ、だって、つきあってない……でしょ？」

当惑したように粉のついた両手をかざし、ミカンさんは言った。

「そんなことない。つきあってる」

「でも……、貴方はまだ高校生だし……、わたし、とてもそんなふうには……」

ミカンさんは粉だらけの手で自分の髪に手をやり、マルガリータのほうに、申し訳なさそうな視線をやった。そのミカンさんの両肩を掴んで自分のほうを向かせると、ハンニバルはたたみかけた。

「じゃあつきあってくれ。俺と！」

「でっ、でも……、ほら、彼女、貴方に告白しているんだから、ちゃんと聞いてあげなくちゃ……」

「ああ、あれは俺たちには関係ないよ。あんなの只のクラスメイト。只の冷やかしだ。夜も遅いし、もう帰るよ。」

それにさ、あいつは何人も彼氏がいるんだよ。大学生だの、物理の教師だの。だから俺とはまったく関係ない。ほとんど口をきいたこともないくらいさ。

今だって夏休みだからって、フォレストと一緒にあって、俺をからかっただけなんだろう。あいつら従姉弟同士だから」

「でも、すごく真剣に……」

そう言うミカンさんにそのまま強引にキスして、更にハンニバルはマルガリータではなく、ミカンさんだけをみつめて言った。

「おまえが好きだ。これで俺たちはつきあった。もう嫌とは言わせない」

第11話 そんな夜

「藪蛇……」

帰り道、失恋で泣きじゃくるマルガリータのやや後ろを歩きながら、俺は頭を掻いた。

まあ確かに、根が真面目なハンニバル君は複数の男と交際しているなんて噂が立っている女と、わざわざつきあってみようなんて考えるような種類の男ではないのだ。強い女という評判のために見栄を張ったことが、致命傷となってしまった。

しかも恐らくハンニバルとミカンさんには、俺が勘ぐっていたような深い関係なんてなかったのだろう。そもそも酔っぱらっていたアマリアの証言だって、思い出してみればあれはちゃらんぽらんな部外者が、憶測で物を言っていただけだったという気もする。

少なくともミカンさんがマルガリータの告白を聞くようにハンニバルを促していた辺り、ハンニバルが一方的に年上のミカンさんに、懐いているだけの関係だったに違いない。

それなのに、二人の間にある年齢差とかいろいろなことで、たぶんまだ何でもなかったはずの二人の仲を、マルガリータの突撃によって図らずも進展させてしまった。

マルガリータは通りを歩きながら、すれ違う人目も憚らずに大声で泣き喚いていた。

俺は彼女が本当はまったく遊び人でもなければ不真面目でもない、純情な内面を持っている女と知っていたから、何とも哀想な、申し訳がないような気持ちだった。しかもこの真実を後でハンニバルに話して聞かせたところで、ミカンさんにのぼせている奴にとって、あまり意味がないことなのだ。

「まあ、元気出せよ……」

そんなことは無理だということを承知で、俺は言った。

とぼとぼ先を歩くマルガリータは、しばらく何も言わずに黙り込んでいたが、やがてぽつりと呟いた。

「悔しいわ。こんなこと」

「そうだな」

「あたしのほうが可愛いのに」

「うん」

「もてるし、人気者だし。あたしってクラスのヒロインよ」

「うん」

「ああいう女は卑怯よ。本当はそれほど弱くなんかないくせに、おとなしい振りをして、いつだって男の注意を惹くのが上手いのよ」

「それはあるかもね。まあ、でも元気出せよ」

「元気なんか出ない。あたし、もう死んじやいたい！」

マルガリータは声を大きくした。

「また大袈裟な。まだ何も決まったわけじゃないだろ。決まったわけじゃないって言うか、つまり何も二人が結婚するってわけじゃない。ただつきあっただけなんだし。三ヶ月後には、どうなってるかさえわかんないようなことじゃないか。」

それに、ハンニバルは大学行くだろ。姉さんがあんなんだから、あいつが家を継がなきゃしょうがないような感じだし……、本人も進学するつもりみたいだった。そうしたら、ミカンさんとは何年も離れ離れた」

「そうよね」

すると単純な彼女らしく、いきなり明るい返事が返ってきた。

「彼はこの町を出て行くのよね。そうだわ、何も二人は結婚するってわけじゃないのよね」

俺はこの女のその単純さ加減と言うか、開き直りの早さにちよつとついていけないものを感じつつ、しかしここでまた腐られても慰めるのが大変なので、マルガリータの言い分に乗った。

「ああ、その通りだ」

それでマルガリータは俄然元気を取り戻して、俺を振り返って強気に笑った。そのときたまたま、スポットライトのように夜の街灯に照らし出されたマルガリータの様子は、金色の髪が風に乗って、短いスカートがひらひら揺れる様子も、何故だか可憐に思えた。

「フォレスト見ててよ、あたし、絶対諦めたりしないわ。年上の女なんかに、あたしは負けない。

障害があればあるほど、あたし、ファイトが湧くもの」

「うん」

「だからきつと彼を振り向かせてみせるわ。今はそうでなくても、だってあたし、絶対彼と同じ大学へだって行ってみせるし。専攻も同じにするわ。同じ授業が取りやすいように」

「その意気だ」

「ハンニバル君はあたしのものなの！ これは運命なんだから！」

「うん」

マルガリータのそうした決意表明を聞かされているにつけ、どうにも俺の胸中に不快な感じがあるように思われたが、それはたぶん気のせいだっただろう。

「頑張ればいいさ。後悔がないように」

「ええ、見ていてよ。誰がハンニバル君の隣で最後に笑うかを。こんな片想いのままなんかじゃ、絶対この恋を終わらせたりしないんだもんっ！」

この俺が近所の美少女のカレンちゃんを差し置いて、馬鹿で凶暴なマルガリータを可愛いと思うなんて、只の気のせいなんだ。

目が覚めた瞬間にそれまで見ていた夢が跡形もなく消えて行くように、この夜の出来事だって、一晩眠ればきつとすぐに忘れてしまいうに違いない。

確証はないけど。

でないとあまりにつらい……ような気がする。

気がしないでもない。

そんな夜。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3389f/>

イーストオアシス

2010年10月28日04時04分発行